「黄砂の越境マネジメント」

深尾葉子　著
大阪大学出版会，2018年9月
350頁，2,300円（税別）
ISBN 978-4-87259-446-1

本書は，黄砂をキーワードとした地域の環境問題に関する人・社会および自然の関わりについて論じた書籍である．

著者は，25年以上の長年にわたり，中国黄土高原地域で環境問題に関するフィールドワークを行っている研究者である．同地域は，よく知られているように，黄砂現象の多発域でもあり，本書は著者が同地域の人々と共に地域の環境問題の解決に係わってきた経験や知見が基となっている．本書のテーマが環境問題であるためもあり，本書では黄砂の気候・気象学にも多くの記述が割かれているが，著者は人文科学に軸足を置く研究者であり，その記述の多くは黄土高原における地域の環境社会学的観点からの知見や考察で占められている．「天気」の読者はおそらくほとんどが自然科学に立脚した専門家であり，本書はそうした人には専門外に感じられるかもしれない．しかし，後述するように，黄土高原地域における環境問題への取り組みの経験や知見は，アジアにおける様々な国際共同研究などにも通底する問題があるやもしれず，参考となる事も多いと考えられるため，あえてこの欄にて本書を紹介させて頂く次第である．

本書の構成は以下のようになっている．

第1部　黄砂・黄土・植林をめぐるバイアス
　1章　日本の黄砂情報と黄砂をめぐる誤解
　2章　黄砂とは何か，どこから来るのか
　3章　砂漠緑化の功罪
第2部　黄砂の発生する地域における人と自然の関わり
　4章　里山としての黄土高原
　5章　黄土高原の空間構造がつくるコミュニケーション・パターン
　6章　黄土高原における「交換」と人間関係の形成プロセス
　7章　人間のコミュニケーションが生み出す「緑」
　8章　「利益」を顧みない人々の手法
　9章　開発援助プロジェクトの予測不可能性
　10章　黄土高原で経験した「枠組み外し」の旅

これを見ても分かるように，本書は，第1部で既有の研究や文献をレビューしながら黄砂やそれを発生させる黄砂現象の解説と批評を行い，第2部では黄土高原における植林や開発援助プログラムなどの環境対策の社会学的観点からの分析と問題への考察が展開されている．

私のように自然科学を専門とする者として，本書に啓発される部分は，黄砂の自然科学を記述した第1部ではなく，むしろ専門外の第2部の内容である．著者はこれまでに黄土高原の環境問題に関わるプロジェクトに参加してきた経験から，本書においては「(人間環境と自然環境の相互作用からなる）環境の非線形的で複雑なシステムに「調査・計画・実行・評価」という線型的アプローチ（を機械的に当てはめること)」の危険性や，「「予見」や「思い込み」を脱して対象を観察すること」の重要性などを具体事例を紹介しつつ提起している．私自身，中国やモンゴルで黄砂や砂塵嵐のプロジェクトに参加し，現在はアジア各国で展開しているJICAの技術協力プロジェクトに参加する中で様々なことを見聞きしてきた経験から，思わず「その通り」と膝を叩く記述にも出合ったし，共感する部分も多い．本書は，現在あるいは将来こうした環境に関わる国際共同プロジェクトを立案・実行しようとする者には示唆に富んだ内容となっている．何より，実際の事例が具体的に記載されており，そうしたプロジェクト経験の追体験にもなろうかと思われる．

いっぽう，長年黄砂を研究対象としてきた専門家の立場からすると，第1部の記載には，残念ながら不充分な点も散見されたのも事実である．著者は近年の我が国の黄砂や黄砂現象の研究文献を丹念にフォローし，本書ではその解説と共に批評も書かれている．しかし例えば「日中共同の調査によれば，黄砂舞い上がりは砂漠周辺の高地やオアシス，道路等からで，砂漠そのものではない」という記述は明らかに誤解に基づくものである．また「日本の「黄砂」という概念は，科学的厳密さを欠いており」という部分も，日本社会一般を指すのか？あるいは日本の研究コミュニティーを指すのか？が曖昧であるなど，概念定義やターミノロジーに厳密さを欠いていると言わざるを得ない記述も多いのは残念である．

とはいえ，本書は，中国黄土高原で長年地域住民と深く関わりながら環境問題へのアプローチを重ねてきた著者でないと見えない問題や課題が記述されてお

© 2019　日本気象学会

り，その問題提起も耳を傾ける価値があると思われるので，興味のある方には是非ご一読を薦めたい．

（気象業務支援センター　三上正男）